

6 術前診断に至らず緊急手術となった、出血性 Meckel 憩室の 1 例

—シンチグラフィの Pitfall—

飯田 久貴・飯沼 泰史・平山 裕
升井 大介・新田 幸壽

新潟市民病院 小児外科

【はじめに】 $^{99m}\text{TcO}_4$ -シンチグラフィ（以下シンチ）で診断に至らず、緊急手術となった Meckel 憩室（以下本症）の 1 例を経験したので、シンチの pitfall を踏まえて報告する。

症例は生来健康な 4 歳の男児。下血を主訴に腸重積の疑いで近医より当科紹介。貧血と代謝性アシドーシスを認めたが、全身状態は比較的良好。高圧浣腸で所見ない一方、回収液は鮮血様で、本症を疑い直ちにシンチを施行したが、撮影中のモニター画面では hot spot を認めず。来院から 4 時間、貧血と代謝性アシドーシスの進行を認め、全身麻酔下の大腸内視鏡へ移行したが所見なし。開腹手術へ踏み切ったところ、回盲部より 60cm 口側に憩室を認めた。後日、濃度条件を変更してシンチ画像を再確認したところ、hot spot の描出あり。

【考察】モニター画面でシンチ画像を確認する場合、濃度条件を変更することで hot spot として認識されることがあり、これは診断率向上にも寄与するかもしれない。

7 大腸切除後の難治性肛門周囲皮膚炎に対するカルメロースナトリウム混合軟膏の効果

大山 俊之・窪田 正幸・奥山 直樹
佐藤佳奈子・仲谷 健吾・荒井 勇樹
横田 直樹

新潟大学大学院 小児外科学分野

大腸切除後の肛門周囲皮膚炎において、既存の各種軟膏に治療抵抗性のあることがある。今回、カルメロースナトリウム（CMC-Na）と亜鉛華軟膏を 3：7 の割合で混合した軟膏（以下、CMC-Na 混合軟膏）の効果を検討した。ヒルシュスプ

ルング病のために大腸全摘を施行された 2 例は、肛門からの頻回の排便、下痢により難治性の肛門周囲皮膚炎を生じた。CMC-Na 混合軟膏を 1 日 2～3 回患部全体に厚めに塗布することで、10 日程度で糜爛が消失し、その後も著明な効果を得た。しかし、調剤上の制約が多く、軟膏調剤は医師が行っている。本剤の仕様に関する薬剤部の対応は施設によって異なる。薬剤部での調剤が可能となるよう、院内倫理委員会に申請中である。

8 巨大膿瘍形成性虫垂炎に対する interval appendectomy の経験

金田 聡・広田 雅行・内藤万砂文
内藤 哲也*・大滝 雅博**

長岡赤十字病院 小児外科
同 外科*

鶴岡市立荘内病院 小児外科**

症例は 13 歳、女児。10 日前から腹痛を我慢しているの近医受診。腹部腫瘤にて当院紹介受診。CT にて腹部全体に及ぶ巨大な膿瘍を認め、膿瘍形成性虫垂炎の診断となった。WBC 33,300, CRP 24.16。痛みが比較的軽度であったため interval appendectomy の方針とした。穿刺ドレナージと抗生剤（DRPM）にて軽快し、約 1 か月後に退院となった。約 3 ヶ月後に laparoscopic interval appendectomy を施行、癒着が高度で難渋したが、完遂できた。術後、CRP の正常化が遅延し 2 週間の入院を要したが、経過は概ね良好であった。

【検討項目】① interval op の選択は適切？②待機期間中の治療は？③手術時期は？